

## 父を父でないと感じたとき

### 〜認知症になった父と私〜

父は、認知症と肺炎のためなくなりました。10年目の法要を無事に終えた夜、夢を見ました。

父はまだ若く、私は小学生。鉄道好きの私のために、特急新型車両に乗り同行してくれました。私が喜んではいしゃいであるところまで目が覚めました。



父は退職後、何事もなく平穩に過ごしていました。

しかし、突然、深夜になると、

「買い物行かないかん。」  
「今何時ね?」「夜、11時よ。」  
「11時って何時ね。」



などと意味の分からないことを言うようになりました。

私は、そんな父を見て、父を父でない他人に思え、悲しくなりました。

母と相談し、父を病院で診断してもらった結果、認知症と診断され入院することになりました。私の頼もしかった父の面影はなくなりました。

やがて、私は、父から遠ざかるようになっていました。

「あなたもお父さんに顔を見せるようにしてね。」

「もう僕が知っているお父さんじゃない。」

お母さんにまかせるよ。」



父のことは母任せになり、母の負担はかなり大きいものになりました。

その後、父は認知症を患いながら肺炎を併発し亡くなりました。私が病院についた時には、父の穏やかに眠る姿がありました。

私は涙が止まらず、

「お父さんゴメン。お父さんは僕に何でもしてくれた。でも僕は、何もできなかった。」

父を父でないと感じて、私のことを誰かわからなくなっても、できることはもつとあった。せめてどこかに相談すればよかったと今思っています。



※認知症についての相談は

筑紫野市高齢者支援課へ… ☎(923) 11111  
担当の地域包括支援センターをご案内します。